

浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—

第121回 (2019.5.7) の要旨

拝読文(『真宗聖典』66～67頁)

仏、弥勒に告げたまわく、「汝等能くこの世にして、心を端しくし意を正しくして、衆悪を作らずは、甚だ至徳なりとす。十方世界に最も倫匹なけん。所以は何ん。諸仏の国土の天人の類は、自然に善を作して、大きに悪を為らずは、開化すべきこと易し。今我この世間において仏に作りて、五悪・五痛・五焼の中に処すること最も劇苦なりとす。群生を教化して、五悪を捨てしめ五痛を去けしめ五焼を離れしめ、その意を降化して、五善を持たしめて、その福德、度世・長寿・泥洹の道を獲しめん」と。仏の言わく、「何等か五悪、何等か五痛、何等か五焼、何等か五悪を消化して、五善を持たしめて、その福德、度世・長寿・泥洹の道を獲しむる」と。

仏の言わく、「その一つの悪というは、諸天人民蠕動の類、衆悪を為らんと欲えり。みな然らざるはなし。強き者は弱きを伏す。転た相剋賊し残害殺戮して迭いに相吞噬す。善を修することを知らず。悪逆無道にして後に殃罰を受く。自然に趣向して神明記識す。犯せる者を赦さず。かるがゆえに貧窮・下賤・乞食・孤独・聾盲瘖瘂・愚痴・弊悪のものあり。佞・狂・不逮の属あるに至る。

今この『無量寿経』を読み進めておりますが、下巻に入って本願成就文が終わると、それに続いて会座が変わって弥勒菩薩を呼び出して教えを説くという形に転じております。ここには未来世の一切衆生ということが課題になっており、大乘仏教が見出した弥勒菩薩という名告りのもとに本願成就という教えを付嘱する内容になっております。その弥勒段に入って、現世の衆生に如何にこの本願の教えを呼びかけるかということが課題となって、まずは煩惱の衆生の現実というものを徹底的に語りかけております。「世人薄俗」(『真宗聖典』58頁)という言葉がありましたけれど、世の中の人々が一緒になって薄っぺらで俗っぽく、お互いに疑い合ったり、けなし合ったり、足を引っ張り合ったり信用ができない人間関係というようなものが徹底的に描かれておりました。だからこそ、その「三毒段」では、本願の教えに触れて欲しいということから、本願が成就した世界としての浄土に命を託して往生していくという呼びかけが、何回もなされてきたのです。その本願の呼びかけ・大菩提心の呼びかけに応える場所として法蔵願心が浄土を建立するという物語になったと言っても良いのだらうと思うのです。

そのような一段が終わって、もう一度弥勒を呼んで(66頁)、五悪・五痛・五焼という言葉で、五つの悪と、「五痛」「五焼」という言葉で、「五悪段」と呼ばれる文脈が始まります。

まず「仏、弥勒に告げたまわく、「汝等能くこの世にして、心を端しくし意を正しくして、衆悪を作らずは、甚だ至徳なりとす」とあります。端心正意という言葉で言われているように、心を正しくする。そして意志も正しくして、諸々の悪を作らなければ、それが無上の功德になるということです。衆悪という言葉は、単に倫理的な悪というよりも、過去・現在・未来にわたって煩惱がらみで人生を生きる中での、苦悩の本、それが悪という言葉で言われています。

仏教では惑業苦という三つの言葉で表現することもあります。惑は煩惱、業は行為です。これは単なる行為ではなく、業という言葉で言い当てられているような、行為することによって、その人に残ってくる傷跡のようなものも含めております。業はインド人のもっている生命感覚の中にある過去と現在と未来にわたる時間の中で、過去が現在に影響し、現在が未来に影響するというような意味をもった行為です。そういう行為を業・カルマン(karman)と言います。

この業という考え方は、ヨーロッパの思想の中にはなかったようです。その業という言葉の意味がよく分らないということがあったようで、ティリッヒ(Paul Tillich)という神学者(あるいは哲学者・宗教学者)が、今から50年以上も前の1960年(昭和35年)に日本に来られた時に、何人かの仏教学者に「業(karman)とは何であるか」と尋ねたけれど納得のいく答えがなかったそうです。その中で、安田理深という私の師匠がティリッヒと対談して、業の意味は、人間が自由に行為すると同時に、その行

為がその後を引いて、次の命の運命的な面を作ってくるものであるという、自由と運命、あるいは自由と責任の複合概念なのだと説明されました。ティリッヒはその説明を聞いて、時間の中に行為が起こるということがその人間にとって避けることのできない責任を引いてくる、そういう実存的事実というものを言い当てる言葉なのだと理解して、頷いて帰られたということを知っています。

そういうわけで、人間の行為が常に煩惱に絡めば悪になるという点から「衆悪を作る」という言葉で表しているわけです。だから倫理的な善人になれということだけではなく、やはりそこには「端心正意」という言葉で押さえられるように、煩惱から脱却して本当の正しい行為をせよという仏陀の深い願いが語られてあるわけです。

そうすれば「甚だ至徳なりとす」とあり、「至徳」という言葉が出てきます。至れる徳ということですから、『無量寿経』には「無上功德」という言葉もあります。親鸞聖人は、その徳が人間にとってはほとんど獲得出来ないものであるとして、仏陀の徳、阿彌陀如来の徳という意味をもっているのだということから、名号は至徳の尊号であるということ、最上の功德、無上の功德という意味を押さえられます。人間が得たくても得られないものでも、その道があることを呼びかけようとする象徴的な表現です。

「十方世界に最も倫匹なけん」。倫という字はともがらという意味ももっていて、人倫という言葉もあるように人の間柄を倫という言葉で言い当てます。匹は一匹、二匹という意味ではなく、匹という言葉で人を表わします。「倫匹なけん」ということで、人々の中にそういうものはないのだということです。

「所以は何ん。諸仏の国土の天人の類は、自然に善を作して、大きに悪を為らずは、開化すべきこと易し」。本願の中には「諸仏の国土」に呼びかけるということが繰り返し説かれてあります。そういう呼びかけをすることの意味は、仏の力が及んでいる「諸仏の国土」に生まれ、その世界に生きているならば、ひとりでの煩惱の命ではないような生き方が出来るようになるということ、自然に善を作して、大きに悪を為らず」と言われているわけです。

「今我この世間において仏に作りて、五悪・五痛・五焼の中に処すること最も劇苦なりとす」。経典は釈迦牟尼世尊の名前で説かれているわけですから、釈迦牟尼世尊が生きていた社会の中で、人間が生きていけば必ず煩惱絡みだし、時代や社会の問題は変わっても、人間関係は常に汚れていく。人間自身が汚れば、当然人間関係も汚れていきます。釈尊が生れて仏になるという場所は、この汚れた世なのです。「三毒段」のところでも繰り返し説かれていたような問題を、ここでは「五悪・五痛・五焼の中に処すること最も劇苦なりとす」と表現して、激しい苦悩の場所であるというふうに説いております。「三毒段」であれだけ苦悩の現実を徹底的に語っているのに、何故もう一度こうして「五悪段」という文脈が開かれていくのかということ、私は素朴な疑問として考えたことがありました。ここで五悪・五痛・五焼という三つのタームで押さえ、それに対して、この段落の最後で「五善を持たしめて、その福德、度世・長寿・泥洹の道を獲しむる」とあり、ここに福德とあり、その内容が度世・長寿・泥洹という言葉で語られます。他の場所では、福德、度世・泥洹という言葉でまとめられていることもあります。つまり、五悪・五痛・五焼に対して度世・泥洹という言葉で表わされてくるような福德の内実をこれから説こうということなのです。

五悪というのは、行為としての悪であり、その結果起こってくるものを五痛という言葉で表わしております。五痛というのは痛みという字ですけど、悲しみという字を加えて悲痛という言葉があるように、この痛みは悲しみと共に襲ってくるような存在自身の痛みのことです。そしてその結果、五焼というような地獄の冥火が存在を焼いてくるという命の危機感を表わそうとしているのです。

五悪に対しては福德という言葉が対応し、五痛に対しては度世・長寿という言葉が対応し、五焼に対しては泥洹という言葉が対応しています。泥洹はニルバーナ (nirvāṇa) の訳で、涅槃のことです。この対応について、前の段との違いはどこにあるかというと、前の段は、煩惱によって行為が起こされて、それが現実に与えて来る人間関係の問題を、「田あれば田を憂い、田なければまた憂えて田あらんと欲う」というような言葉で象徴されていたような憂いという心情や存在が語られておりました。雲霧が天を覆うように、煩惱の暗闇が命を覆う在り方を憂いという言葉で表しています。それはつまり、今この生きている事実を覆っているような暗さを徹底的に教えて、それに対して如来の本願が呼びかける明るみというものを

教えようとしています。

それに対して、ここから展開していく「五悪段」は、改めて何を言おうとするのだろうかということを通して内容を読んでみますと、五悪・五痛・五焼とは、煩惱によって業を起こし、業によって苦悩を引く、その因果が三世にわたって我々に取り憑いていることを、様々な言葉で教えようとしているのです。清沢満之が、静かに自分の人生を反省してみると、過去・前世も、そして未来・来世のことも分からない。だから過去と未来の間にある現在というものも不安定であり、一体自分とは何であるかということがほとんど分からないと述べております。そこで、この自分とは何であるかという問いを起こしたときに、「自己とは他なし」という言葉で始まるあの名文、「絶対無限の妙用に乗託して任運に法爾に、此の（現前の）境遇に落在せるもの」が出てくるのです。つまり絶対無限の妙用に乗託している自分として、自己を見出したのだと思います。それは「三毒段」で言われていたような現実の地獄のような人間の在り方が想起されます。自分自身が病苦を持って結核に病んで血を吐いて生きているという、その現実における命の不安に突き動かされて自分が生きている。そういう中であって、絶対無限の妙用によって自分が立つ大地があることを発見して、そこに立つ自分が今ここに落在しているのだと言うのです。

この清沢満之の心境がよく示すように、「三毒段」だけでは過去世や未来世のことがよく分からない。しかし今度はもう一回、人間の業として、行為の結果が現在になり、現在の行為が未来を引くという関係の中にある存在として、ここでは五悪・五痛・五焼という言葉で教えようとしているのではないかと思います。だから、悪を為すということが「痛」や「焼」という因果関係で示され、それに対して福德、度世・泥洹という形で仏教が語ろうとする平安な境地、すなわち生きていることが喜びであり、その中に静けさのような命の本来性が感得されるような在り方が勧められているのです。こうした三世の中にある現在ということを改めて教えられていることを思うのです。ですから「五悪・五痛・五焼の中に処すること最も劇苦なりとす」というのは、過去を背景として、現在の因縁がまた未来を引いていくという、この現実の時間存在を生きるということが、劇（はげ）しい苦であると押さえているわけです。

「群生を教化して、五悪を捨てしめ五痛を去けしめ五焼を離れしめ、その意を降化して、五善を持たしめて、その福德、度世・長寿・泥洹の道を獲しめん」。五悪・五痛・五焼というそれぞれの在り方を捨て去り離れて、さらに「その意を降化して」ということですから、つまりそういう劇悪極苦の中にある在り方を教えて降参させるという意味です。

「五善」は五悪に対する言葉です。そして福德、度世・長寿・泥洹という言葉によって、その至徳の内容を押さえております。仏陀が教えようとする福德の内容は、度世・長寿・泥洹という意味をもっているということです。度世は、世を超えるという意味ですから、世間の中の福德ではなく、世間を超えるような道に、命が本当に長らえていく長寿があるということです。これは世間での長生きとは異なります。

現代の我々は、長寿になったから幸せかということ、そういう人ばかりではありません。歳をとるということは苦悩が深まります。老衰という言葉があるように、老化は衰えることと重なるわけです。それは体力が衰弱するだけではなく、耳も目も嗅ぐ力も味わう力もあらゆる生命力が全部衰える。これが老化現象ですから、老化と共に苦悩の命が深まるわけです。だから必ずしも長生きすれば幸せであるというわけではない、面倒な問題がここにあります。

そういうわけでここにある長寿とは、ある意味で生命を超えるということを経験的に表わそうとするわけです。生命でありながら生命を超える。命でありながら命を超える。そういう意味が長い命を与えられるというところにあるのではないかと思います。文字通りであつたら意味をほとんど失うわけです。

そういうふう全体をまずは押さえるような前文があつて、そこから「仏の言わく」と言つて五悪段が始まります。そして「その一つの悪というは」とあつて、その次に「諸天人民蠕動の類」という面白い言葉があります。蠕動ということは、蛇やミズなどの軟体動物です。あるいは蜻蛉飛蠕動というような言葉もあつて飛んで動き回る昆虫なども含まれるかもしれません。人間だけが問題なのではなくて、様々な生類が「衆悪を為らんと欲えり。みな然らざるはなし」とあります。前の段にもあつたように、とにかくすべての生きものが行為をすると悪になってしまうということです。「強き者は弱きを伏す」ということも、弱肉強食と言われるような自然界の道理を示しているのでしょう。強いものが弱いものを伏すと

いう生命の現実が続いていき、「**転た相剋賊し残害殺戮して迭いに相吞噬す**」とあります。動物同士が食い合ったりする様を人間の上にも当てて、お互いに殺し合い切り刻みあい、そして飲んだり食いついたりし、こうして生命の歴史を生き延びてきたのが人間であるということをつくづく思うことです。

そういう状態だから「**善を修することを知らず**」とあります。この善とは、仏陀が智慧として開いた涅槃に至る善、涅槃の徳を味わうような善という方向性を示すものです。しかし、この世を動かして来た強きものが弱きものを伏するという生命の論理というものは、善を修することを知らないのだと言っております。なかなか厳しい見方だと思うわけです。だから「**悪逆無道にして後に殃罰を受く**」とあって、行為が業として起こって、それが後の命に影響を及ぼすということを、ここでは「悪逆無道」と表現しています。つまり悪業を起こしてその結果が殃罰になるのだと。過去の行為が現在に感じられ、現在の行為が未来に感じられる。その因果の中に、悪逆を起こせばつらい人生、つらい命を感じざるを得ない、苦悩を感じざるを得ない。苦悩を感じて、そこからそのことを罰だと感ずるという因果です。

そのことは「**自然に趣向して神明記識す**」とあります。自然は、こうした因果が自然に赴いていくということです。「神明記識す」の神明とは、天や地にいる神々のことで、その神々がそれを記録して知っているのだということです。これは我々が、過去の行為経験を背景として現在の自分を作って今の命の苦悩を引いているのだと感ずる時に、ここには原因と結果の法則というものがあって、そのことを神々が知っているのだとして神話的に表現したものだと考えられます。「人は見ていなくても、お天道様が見ているよ」という言い方がありましたけれど、何かそういう他人が見ていなくても何かが見ているのだという生命感覚を表現したものです。閻魔様の閻魔帳のようなものだと思います。そして「**犯せる者を赦さず**」とあります。つまりそういう悪を犯したものは許されないのだということです。

その後「**かるがゆえに貧窮・下賤・乞匄・孤独・聾盲瘖瘂・愚痴・弊悪のものあり。佺・狂・不逮の属あるに至る**」とあります。こういう言葉は差別状況を肯定し助長する思想になる危険があります。今では出してはいけない言葉です。こういう教えが元になって差別が起こったと言われても仕方ありません。これは自分自身が自分の背景を自分の責任において感ずるということを教えている言葉だと思いますが、それを他人の苦悩を説明する言葉に転じてしまうと差別が生まれてしまうのです。阿弥陀仏の眼からすれば、一切衆生はみな平等なのです。

「貧窮」「下賤」とありますが、これは尊貴という言葉に対して賤しいという言葉が使われています。人間が社会を作って以来、民主主義などと言いながら、差別を生み出し続けているという問題がここにあります。そして「乞匄」は、ものを乞うということです。これも差別語になりうると思います。それに加えて「孤独」という言葉も出ています。寂しさとともに生きる命の無意味さを教えています。苦悩を感ずるような生活を表す言葉として使われております。「聾盲瘖瘂」、これは身体的不自由さを指す言葉です。そういう苦悩を克服した方として、ヘレン・ケラー (Helen A. Keller) という人が現れたり、真宗門徒の中にも両手両足を切断せざるを得なくなって、そして仏法に出会った方 (中村久子) があつたりしますが、自分が自分で本当にその命を生きて行こうとする勇氣に転ずるような方向性が、本当に要求されるのだらうと思います。

本当は、こういう言葉を経典として扱ってはいけないと思いますが、そういう苦悩の状態を差別視するのではなくて、苦悩の命の在り方を教えるための言葉なのだと思え止めるべきです。私たちでも、一応目が見えたり、耳が聞こえたりはしていても、何が本当に見えているのか、何が本当に聞こえているのかということが問いかけています。苦悩の人生を引いて来る五痛という言葉が先ほど出てきましたが、苦悩の存在として現実はあるのですけれど、我々がいただく場合は、決して他人を差別するための言葉ではなくて、自分に教えとして聞くための言葉として聞かなければいけないと思うのです。「愚痴・弊悪」という言葉も、例えば法然上人が「愚痴の法然房」とご自身のことをおっしゃっているわけですから、これは他人のことではない。「佺・狂」。これも使ってはいけない言葉ですが、精神的に錯乱している在り方を言います。「不逮の属」。不逮という言葉は、およばないということ、満足状況にならないということを表わしているのではないかと思います。今日は「不逮の属」までにしましょう。

文責：戸次顕彰 (親鸞仏教センター研究員)